

すこやか生活

Yamaguchi Clinic



目次： ページ

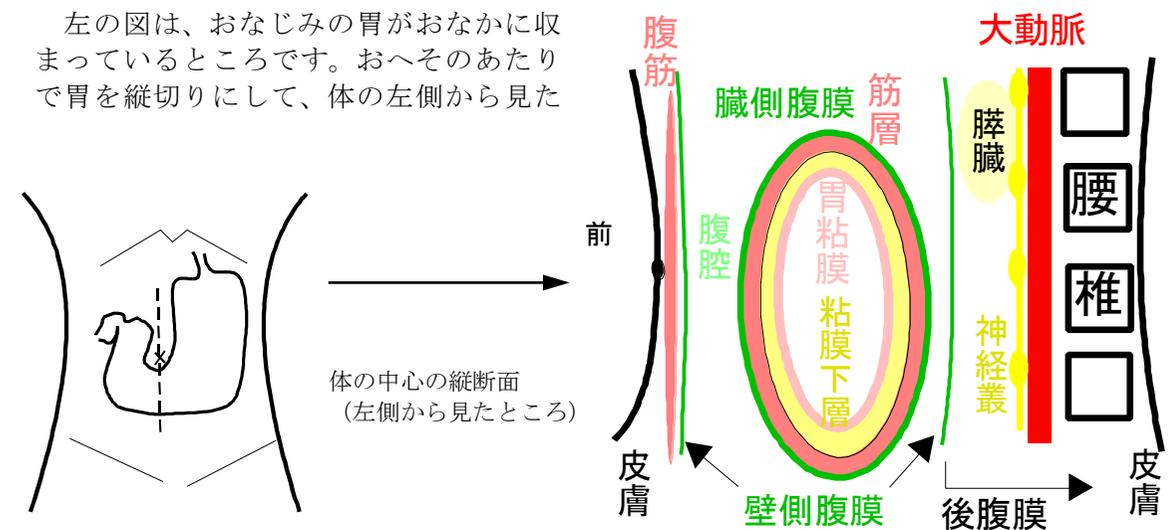
腹痛と内臓の構造	1
胃の病気で見る腹痛の起こり方	2
腹痛の位置と臓器	3
急を要する腹痛	3
腹痛時の対応	3
編集後記	4

1. 腹痛と内臓の構造

腹痛と一口に言っても、臓器もそれぞれ、場所もそれぞれ、原因や痛みの仕組みもそれぞれです。ところが、おなかが痛いといほとんどの人は、「胃が痛みます。」と言って来院します。胃の痛みの場合もありますが、痛みの本当の原因がわからないこともまれではありません。そこで、何はともあれ、胃を例にとって、おなかの痛みの起こる仕組みについて考えてみましょう。

左の図は、おなじみの胃がおなかに収まっているところです。おへそのあたりで胃を縦切りにして、体の左側から見た

のが右の図です。おへそのある前方から、皮膚、腹筋があります。隣接した緑の縦線から、右側の緑の縦線の間が、腹腔と呼ばれる、いわゆるおなかの中にあたります。胃を輪切りにすると、内側から、胃粘膜、粘膜下層、筋層があり、臓側腹膜に包まれています。背中側の臓側腹膜の後ろは、膵臓、腎臓や脾臓、神経、腹部大動脈などがあり、後腹膜と呼ばれています。一番背中



です。通過障害が起こると、食事どころか水を飲んでも吐いてしまいます。また、腸がねじれると、酸素や栄養を送っている血管が折れ曲がり、血流障害を起こして腸が死んでしまうこともあります。ここまですると命に関わります。

口や鼻から腸へチューブを入れ、閉塞部の口側に溜まっている腸の内容物を流し出し、場合によっては閉塞部を解消する手術が必要です。

急性膵炎

アルコールや胆石が原因で膵臓の消化液が流れ出る管がつまり、膵臓自身が融けてしまう病気です。膵臓が融けると、そこからまたタンパク分解酵素が出てきて、膵臓の周辺まで融け出し、大事に至ります。内臓のメルトダウンとも言えるでしょう。

子宮外妊娠破裂

子宮でなく卵管内で受精・着床が起こり、そこが破れた状態です。大量出血で、お腹の中が血の海になることがあります。

解離性大動脈瘤

内臓や足へ血液を運ぶ大動脈の壁が裂けることです。足の方向へ裂けていくので強い腹痛が足方向へ進み、同時に内臓や、足の循環障害が起こります。動脈硬化で大動脈が傷み脆くなってしまうことが原因です。治療は手術です。

尿道閉鎖

高齢者の男性でよく見られ、前立腺肥大などで尿が出ず、尿が溜まって膀胱がパンパンにふくらみます。早期に導尿しないと、腎臓を痛めてしまいます。

編集後記

3月下旬になり、日差しに見合った気温になりつつあります。先月の予想通り、梅に引き続き桜が咲き始めそうな気配です。今朝も、少し肌寒いと思いましたがお昼にかけて暖かくなり、久しぶりに綿の入っていないウインドブレーカーを着ました。11月以来に袖を通したウインドブレーカーのポケットはふくらんでおり、何が入っているか確認したところ、この冬にどこかで無くしてしまったとガッカリしていた自転車用の厚手の手袋がありました。しばらくは一般の手袋を着用していましたが、自転車の操作がしにくく、新しいものを購入した矢先でした。出てきた手袋は最後に数回使ってやり、この冬の使い納めにしようかと思っています。今回は嬉しい誤算でした。

先日来、高校の生物の本に目を通しています。何を今更ですが、意外と奥が深く、しかも近年の医学実験で使われている実験法などが、ごく当たり前に記載されていることに目を丸くしました。ゆとり教育でどうせ大したことを教えていないのだろうと思っていましたが、それは義務教育だけのこと。高校にもなるとそれなりにレベルの高い内容になっていたことに驚きました。それにしても、中学での内容と、高校での内容のギャップは大きく、我々の時代中学校で習っていたことが高校にまわり、高校は高校で大学での勉強に備えるために、それなりにレベルの高いことを教えざるを得ず、今日の高校生の大変さをかいま見ることになりました。直接仕事には関係ありませんが、たまには学問の基本部分をおさらいしておくのも良いものです。



山口内科

(ゴールデンウィークのお知らせ)

4/28 29 30 5/1 2 3 4 5 6 7

〒247-0056

鎌倉市大船3-2-11

大船デパートビル201

通常どおり ← 休み → 通常

側には、腰椎と呼ばれる背骨があります。背骨より前方のどこかに問題があれば、おなかの痛みを感じます。

この図の中で痛みを感じやすいのは、神経です。次に敏感なのは腹膜で、少しのことで痛みを覚えます（臓側、壁側ともに）。胃壁では、粘膜下層も比較的神経が豊富なので、痛みを感じやすい部分です。痛みの原因として皆さんが一番イメージしやすい胃粘膜がこれに続き、最後が腹筋などの筋肉です。その他、まれですが大動脈の壁が縦に裂け目が入る解離性大動脈瘤や、動脈が詰まるため腸梗

2. 胃の病気で見る腹痛の起こり方

再度、胃の断面図をご覧ください。胃の粘膜に炎症が起こったり粘膜が少し剥ける、いわゆる胃炎では、胃がヒリヒリする比較的弱い、ガマン可能な痛みが生じます。

粘膜下層まで炎症が及び、胃の壁が深く掘れたのが胃潰瘍です。比較的神経が豊富な粘膜下層まで病気が及んでいるため、胃炎より強い痛みを覚えます。“胃がシクシクする”というやつです。

潰瘍の穴がより深く掘れていくと胃の消化運動の駆動力を担う筋肉に達します。痛みは引き続き中程度の痛みを感じます。

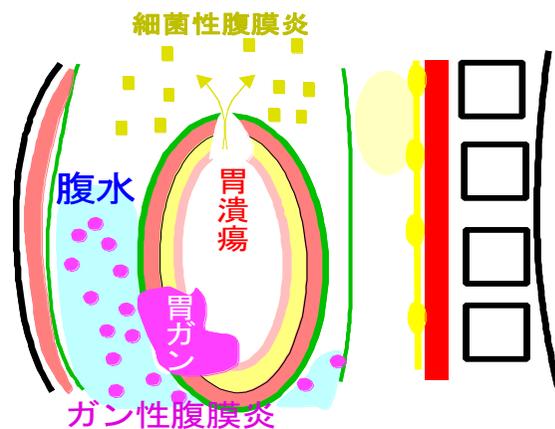
神経の豊富な臓側腹膜まで炎症が及ぶと、ガマンしづらい痛みを感じます。臓側腹膜を破って胃壁の底が抜けると、腹膜炎を起こします。腹膜炎になるとガマンできない痛みとなるので、救急車を呼ぶ方もいます。底が抜けると、塩酸である胃酸やペプシンと呼ばれるタンパク分解酵素が敏感な腹膜の神経を化学的に刺激するため、強い痛みを生じます。加えて、穴から食物や、食物に含まれる細菌が腹腔へばらまかれ、強い炎症を惹起します。胃ガンも同様に、胃壁を内腔側から腹膜方面へ発育し、炎症が広がります。ガンが臓側腹膜を破り、腹腔内細胞

塞(?)といってもよい虚血性腸症候群も比較的強い腹痛の原因です。最近あまり使われない言葉ですが、“腸ねんてん”は腹腔内で起こる癒着によって、腸が動く時に移動制限を受けて、引っ張られて腸がねじれた状態です。一時的な腸管の血流が滞るので、狭心症のような痛みがでたり、腸の運動が止められ、腸閉塞となってガスや便が腸に溜まり、お腹がパンパンにふくれる痛みが生じます。

次に胃の病気でこれらの部位で生ずる痛みについて見てみましょう。

が飛び散るとガン性腹膜炎となります。ガンの炎症は、細菌感染による腹膜炎と比べると、熱や痛みがあまり無く、初期に気づかれることはまれです。次第に腹腔内には“腹水”という水が溜まります。しかも、ガンによる腹水は薬が効きにくく、おなか

がパンパンに張ってくる痛みを覚えます。胃の周囲を見ますと、手前が食道で先が十二指腸につながっています。どちらも胃と近接しているため、痛みも似ており、食道はゲップや胸焼けとして感じたり、十二指腸潰瘍は背中側の壁が掘れると、背部痛として感じることもあるくらいで、区別はつきません。



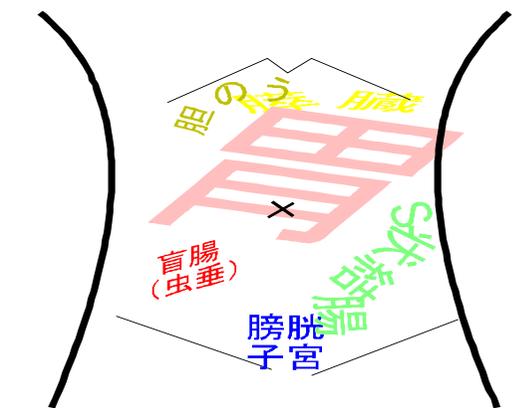
3. 腹痛の位置と臓器

腹痛で来院する人を診察するとき我々はお腹を触診します。触診をするに当たり、①痛みの位置、②痛みの強さ、③腹膜刺激症状の有無、④胃腸の動きなどを確認しながら進めています。主な臓器の痛みの位置を図に示しました。

右上腹部は、胆のうや肝臓があります。上腹部中央は、胃や十二指腸球部、食道下端などの痛みが出る場所です。左上腹部はあまり特徴的な痛みが出る場所ではありませんが、胃痛や腸閉塞、虚血性腸症候群などで痛みます。一番わかりにくいのは、おへそのあたりが痛む場合です。様々な臓器が重なっているため、痛みの原因もまちまちですが、最も多いのが胃です。右下腹部は盲腸（虫垂炎）の痛みが最も出やすいところです。その他、大腸憩室炎など上行結腸などの腸の痛み、右卵巣の痛みもここです。下腹部中央は、膀胱炎など膀胱痛、子宮、直腸

の痛みです。左下腹部はノロウイルスなどの大腸炎でよく見られるS字状結腸の痛みが中心です。下痢を伴うのも特徴的です。大まかな臓器の痛みの位置を図示しましたので、ご参考までに。なお、必ずしも図と一致するわけではありませんので、くれぐれも安易な自己診断は慎みましょう。

腹痛の場所と主な臓器



4. 急を要する腹痛

細菌性腹膜炎

前ページの胃潰瘍の図の様に、胃腸の壁の底が抜けて、食物や便が腹腔内へ散らばることで起こる炎症が中心です。原因は、胃・十二指腸潰瘍やガンの穿孔（穴が開くこと）、盲腸（虫垂炎）、憩室炎などが代表です。

筋性防御と呼ばれる痛みで腹筋がかかかちにこわばるのが特徴です。炎症が強いため、高熱を伴うことが多く重症で、

抗生物質だけで治ることはまれなので、至急手術で抜けた底を処置しなければなりません。

腸閉塞

様々な原因で、腸の内腔の通過障害が起こった状態です。手術の際のおなかの中で腸の癒着が生じ腸がねじれた場合、大腸ガンなどで腸の内腔がふさがった場合、腹膜炎などで腸の動きが止まり、見かけ上、腸の通過障害が起こった場合等

腹痛時の対応

ガマンしづらい痛み

重い病気の可能性がありますので、至急、受診しましょう。普段から、健診やドックをうけて、自分のおなかの臓器に問題がないかどうか知っておくと対応しやすいので、胃腸だけでなく肝、胆のう、膵臓なども超音波検査でチェックしておくといよいでしょう。

ガマンできそうな痛み

少し様子を見て、痛みが軽減したくなるようなら心配が少ないと言えます。また、腹痛があると食欲が無くなりますが、痛みが強くなると食べ物を受け付けられなくなります。そこで、ガマンできそうな痛みでも、食事が摂れなかったり痛みが増してくるようなら、早めに受診した方が良いでしょう。ガマンにも限度があり、それを越えてしまうと大事に至ります。